NO.1　横手市農業振興センターだより　令和５年３月10日

稲作情報

ＪＡ秋田ふるさと　営農経済部　米穀課　☎ 23－6556
各営農センター
金　沢 ☎ 37－2124　大　雄 ☎ 52－3665　横　手 ☎ 32－8220　増　田 ☎ 45－2035
平　鹿 ☎ 24－3110　十文字 ☎ 44－3101　大　森 ☎ 26－4155　雄物川 ☎ 22－2266
秋田県農業共済組合横手市支所　☎ 32－4150
農産課（農作・畑作・損防）　☎ 32－4404　家畜果樹園芸課（家畜・果樹・園芸）　☎ 32－4407
建物農機具課（建物・農機具）　☎ 32－4119　収入保険課（収入保険）　☎ 32－4229
秋田県平鹿地域振興局　農林部　農業振興普及課　☎ 32－1805
横手市農林部　農業振興課　☎ 32-2112・32－2113

種子消毒の効果発揮は、浸種開始・吸水２日間の水温確保がポイント！

ふるさと稲作ほっと LINE　QRコード 友だち登録お願いします!

★浸種は好適な日平均水温10～15℃が確保しやすい4月上旬を目安に開始しましょう。★

育苗ハウスの消雪に取り掛かり、育苗作業に備えましょう。最近の天候不順から今年も浸種水温の低下等により、催芽ムラ・出芽ムラが発生する危険性があります。まずは浸種開始の温度確保による種子消毒効果の発揮と、浸種積算温度の確保による均一な催芽（ハト胸状態確認）に努めてください。

床土・覆土の準備

・床土は、土の粒子が細かすぎないｐＨ５前後で透水性・保水性に優れたものが適します。
・覆土は、５㎜以上の粒状土（ガラ土）が適しています。

例年、粉状の床土を使用したために育苗障害の発生や、過湿による土の持ち上がりが見られますので注意してください。粉状土はできるだけ使用しないようにしましょう。

※床土の肥料・農薬の混合は播種日の５～７日前頃までに準備しましょう。
※こめパワーマットは、使用方法をよく確認して使用しましょう。

★床土・覆土の必要量★

苗の種類	植付株数（坪）	箱　数	床　土（3.5㍑／箱）	覆　土（1.0㍑／箱）	合　計（4.5㍑／箱）	20㍑缶
稚　苗	70株	20～22箱	77㍑／10ａ	22㍑／10ａ	99㍑／10ａ	５杯分
中　苗	70株	27～30箱	105㍑／10ａ	30㍑／10ａ	135㍑／10ａ	７杯分
必要量	株	箱	㍑／10ａ	㍑／10ａ	㍑／10ａ	杯分

★床土配合資材★（焼き土・無肥料培土を使用する場合）

区別	品　名	容量	使用量(箱当)	ワンポイント
育苗肥料	育苗専用肥料２号Ｋ	20kg	30～40ｇ	育苗専用の肥料（５－８－５） 稚苗30ｇ／箱　中苗40ｇ／箱
	ロング育苗肥料Ｋ	20kg	40～50ｇ	ロングタイプ肥料（40日） 60ｇでは育苗後半苗徒長が見られる
育苗農薬	ナエファイン粉剤	１kg ３kg	６～８ｇ	１成分で３種（ピシウム菌、フザリウム菌、リゾープス菌）に防除効果有り。
健苗資材	ハイフミン	10kg	200～300ｇ	ピートモスを原料に発根を促進する。
	アヅミン	20kg	100～200ｇ	発根を促進する腐食酸を原料とする。

種子消毒

例年、育苗期間中に様々な病気の発生が見られます。現在、消毒剤吹付種子に使用しているテクリードＣには、**ばか苗病、苗立ち枯れ細菌病、いもち病、もみ枯れ細菌**などに適用があります。しかし、あくまでも種子に吹付け・塗抹している状態です。種子消毒は**浸種時に籾が水分と同時に薬剤を吸収**して初めて消毒効果が発揮されますので、吸水しやすい水温の確保に努めましょう。（裏面　浸種期間中の注意事項参照）

★消毒種子の種類と対応方法★

消毒の種類	無消毒種子	消毒剤吹付種子	温湯消毒種子
薬剤名	テクリードＣフロアブル	テクリードＣフロアブル	タフブロック(微生物農薬)
方法	200倍液 浸種前　24時間種子浸漬	そのまま２日間浸漬 （実際吸水されて消毒される期間）	催芽時または催芽前に水に溶かして使用 催芽時：温度30℃で24時間処理 催芽前：浸種水温で24～48時間処理
注意事項	浸漬時の水温は10～15℃とし、浸漬したら袋をゆすって、薬液が全体に行きわたるようにする。	浸漬時の水温は10～15℃とし、**浸漬開始後２日間は袋をゆすったり、水のかけ流し・交換はしないこと**。	十分に撹拌して種もみを投入し、投入後よくゆする。処理後液を撹拌せずに、種もみを取り出す。
その他	種子１kgに対し薬液２ℓ	種子１kgに対し水約3.5ℓ	水量に対し**200倍希釈**

※温湯消毒種子は、それだけでは化学農薬消毒と比べると効果が劣ります。タフブロックと組み合わせて使用することで、防除効果が高くなります。（推奨）
※消毒効果が劣りますので、異なる品種や、消毒方法の異なる種子を同じ容器で浸漬しないでください。

育苗計画

昨年は登熟期の日照不足により、刈り取りが遅れる傾向がありました。しっかり実らせる登熟期間を確保し、収量増につなげるため、遅植えにならないよう適期田植えに向けて作業を進めましょう。

★育苗計画★

苗の種類	田植え予定日	播種日	催芽	浸種期間
稚　苗	５月15日～20日	４月25日～30日	播種５～６日前 （陰干し期間1～2日以上）	播種日の13～15日前 （日平均水温積算温度100℃目安）
中　苗	５月20日～25日	４月20日～25日		
自分の計画	５月　日～	４月　日	４月　日	４月　日～　日

※浸種は、種子消毒の効果を十分に発揮させることと、種子の発芽を均一にさせるために行うものです。浸種時の水量・水温等、毎日こまめに管理しましょう。

浸種期間中の注意事項

1、水　　量 … **種もみ１kgに対して3.5リットルの水**が必要です。少なすぎると酸素不足となり、発芽不良を引き起こしますので注意してください。

2、水 の 温 度 … 10℃以下の低温で浸種すると、種子消毒の効果が落ちる・種子休眠が深まる場合があります。再休眠した種子は出芽がかなり難しくなるようです。そのため**水温は10～15℃**となるように調整する必要があります。また、できるだけ外気に触れないようにすることが適温を保つことになりますので、水の入替時お湯を使う・ビニールシートなどで囲う等対策をしてください。特に、直射日光が当たる場所は水温の変化が大きくなりますので避けてください。

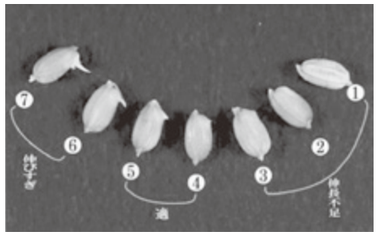
★水温と浸種日数の目安★

水　　温	10℃	15℃以下
浸種日数	６～８日	５～７日

3、水 の 入 替 … 消毒吹付種子の場合、**最初の２日間は水の交換はしません**。(薬剤を種子に吸収させるための期間）吸水するには、10℃以上の水温に調整することが重要です。**その後は２～３日置きに交換**し、種子を衛生的に保ちましょう。

4、ばか苗病対策 … 乾燥調製施設内での種子保管や浸種は、前年の菌が飛散している事が考えられますので、作業場内の清掃を徹底する（保菌された稲わらや籾殻等）か、場所を変えて行いましょう。

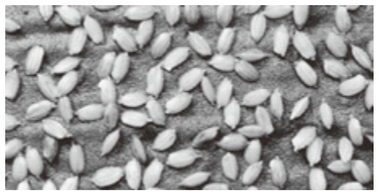
種子の催芽



催芽はハト胸程度とし、伸ばしすぎに注意してください。**催芽器使用の場合：水温30～32℃（24時間）**。催芽作業は午後～夕方から行うこととし、水温は事前に温めて催芽器内温度を確保します。翌朝に出芽状態を確認し、時間調整を行います。

湯通しの場合：36～40℃のお湯を準備。種子袋の中心部まで温まるように十分湯通しし、その後上記催芽温度で保温します。品種によって発芽速度が異なるので、品種を複数取り扱う場合は注意が必要です。

播種時のポイント



中苗か稚苗かで、播種量や育苗日数が変わってきます。播種量は、中苗で乾もみ100～120ｇ。稚苗では､180ｇを目安に播種しましょう。試し播種により実際の播種量を確認してから本作業に取りかかりましょう。**適正な播種量で健苗育成**に努めましょう。

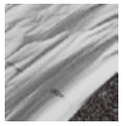
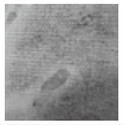
播種時のかん水量を確認しましょう。かん水量は、２～2.5ℓ／箱が適量となります。極端に少なかったり、多すぎると発芽不良や苗立枯病の発生要因となります。

被覆資材の種類と使用方法

被覆資材は、べた張りすることで保温によって、種子を均一に発芽させる資材です。使用する被覆資材の特徴により加温・保温力が違い、管理によっては出芽不良等障害が発生する場合があります。

使用する被覆資材の特性を十分理解し、適切な温度管理に努めてください。

★被覆資材の種類と、その特徴★

被覆資材の種類(商品名)	使用ポイント
シルバーシート（シルバーポリトウなど） 	銀色～灰色の薄いシート　遮光率が80～90％と高い。 ・シート自体に熱が吸収されるため、地温が上がりやすく、夜間の保温・保湿性が高い。 ・ハウス内の温度変化により開閉し、ハウス内の温度を20～25℃位に保つ。 ・急に高温条件になると芽が焼けやすい。
発砲シート（ミラマット・健苗シートなど）	白く厚みのあるシート（マット）　遮光率50％前後 ・低温時において保温性が高い。 ・地温が上がりやすく冷めにくいため、**ハウス内の温度40℃以上で開閉が必要** ・芽が伸びやすいため、出芽後早めに除去する。
反射シート（太陽シートなど）	アルミのような（光を反射する）シート　遮光率80～90％ ・光を反射するため、地温抑制効果が高い。 ・ハウス内の温度が40～50℃位までは特にハウスの開閉が必要無く、苗箱の温度が18～20℃位の適温に保たれる。 ・**低温時には保温力が低い**ので、保温を高める工夫が必要。他資材を掛けながら（二重掛け）保温力を高める。
不織布（ラブシートなど） 	白または黒色の薄いシート（不織布） ・他の被覆資材と比べて、遮光・保温・保湿性が高くはないが、適度にある。 ・育苗器で出芽した苗の緑化に使用するのが一般的 ・低温時、保温対策として太陽シート等と併用する。

※古くなった資材の使用で、機能低下により温度管理に失敗する例があります。経年劣化の場合は、交換しましょう。

★育苗期間の温度管理★（苗は低温には強いが高温には弱い）

	期　　間	温 度 条 件		管　理　ポ　イ　ン　ト
浸　種	水の温度により５～10日間	日平均**水温10℃**を確保		水温が低すぎないように注意する。
催　芽	１～1.5日間	**水温30～32℃**		ハト胸程度を目安に行うこと。（１㎜程度）
出芽期	３～５日間（低　温　時５～７日間）	**温度28～32℃**（べた張り出芽､20℃以上）		最も大切な時期、被覆保温資材により温度が変化する。急激な温度条件にしない。（特に高温）
緑化期	２～４日間	ハウス内温度	昼間：20～25℃ 夜間：10℃以上	葉幅を大きくするための温度条件。
硬化期	15～20日間		昼間：15～20℃ 夜間：５℃以上	苗を徒長させないために、やや低めの温度条件にする。